

福祉介護コース学生のアイデンティティと自己効力感 —職業選択と実習による社会経験との関係—

小松一子 川野素子

若者の「ニート」層が増加する社会で、専門知識と職業意識をもつ学生を育成する教員は、その精神的側面を理解して対応する必要性を感じている。そこで社会福祉学部の学生を対象にアイデンティティ、自己効力感について先行研究で作成された尺度を使い比較検討した。社会福祉学部の学生もアイデンティティは高く、学部を選んでいることと関係していた。福祉介護コースの場合は学年と共にアイデンティティも発達していたことから、職業的視点を持つことや介護実習における社会的体験が関係していると思われる。自己効力感は、学力と関係なく介護実習への学生自身が感じる課題の重さに関係し、やり遂げたあとは自信となって、学年が上がるごとに上昇傾向にあった。しかし、学生の特性も見えるため、指導困難学生の理解や個別指導に生かせる尺度ではないかと思われる。

キーワード：介護福祉学生、介護実習、アイデンティティ、自己効力感

Recently young NEET population is increasing, and we feel the scholastic ability and motivation of students are getting lower. We, teachers in welfare nursing course, are fostering the expertise and occupational consciousness of the students. In educating students, we feel the necessity to understand their mental side. For these reasons, we conducted a comparison study of the identity and self-efficacy of the students in social welfare course and welfare nursing course. Since the students who major social welfare chose the department when entering the university, it can be said that they have identity of their purposes. We found that this result related to identity standard concerning occupation choice and social experience. The identity of the students majoring welfare nursing developed as their grade advance.

It seems that the identity of the students relates to their professional viewpoint and nursing practice through social experiences. The self-efficacy is lowest for nursing students who prepare real practice with seriously ill patient at extreme edge advanced study. Students in welfare nursing course gain confidence after experiencing nursing practices, and they feel more confident as their grade advance.

Key words : students in welfare nursing course, Nursing practice, Identity scale, Self-efficacy

1. はじめに

介護福祉士養成は、専門職教育であるため介護実習をその中心的なものとして位置づけ、時間数が社会福祉士養成と比べ2.5倍と多くなっている。本学の場合、介護実習（以下実習）は1回生の学年末から始まり、各段階の実習にはそれぞれ課題

が組まれている。また期間も長いもので約1ヶ月あり、学生にとって実習は不安と緊張を伴うものである。実習は授業とは全く異なる現実社会での経験であり、学生の持つ知識や経験では到底足りず、個人の持つ社会性、人とのコミュニケーション能力、感性、そしてそれらを最大限に応用できる力が必要とされる。そのような経験は、介護福祉士コースの学生にとってアイデンティティの成

長・発達や、実習の取り組み方に関係してくるかについて調査を行ってみた。

実習は、「やる気がでない」学生や「学校が行けというから来た」、「何をしたらよいかわからない」という消極的な学生にとっては非常に辛いものであると思われる。故にそれらの学生のなかには、実習を前に介護を離脱する、あるいは実習の途中で中止する、また、実習を終えても一定の評価が得られず再実習という結果を招く。そのような学生の対応に、定期的巡回指導以外に学外での接触の必要性もあり、教員にとって介護実習は、負担が大きい。また近年そのようないわゆる手のかかる学生が多くなってきたように感じる。

最近の学生の傾向として感じるのは、学ぶことに積極性が感じられないことである。少し前は「モラトリアム人間」という言葉が使われた。また「指示待ち人間」、「マニュアル人間」という言葉もある。これらの言葉が過去の言葉のようになって、最近では「逆切れ」や「ニート」という言葉もある。最近の若者の特徴として自分の目の前の困難や自分の問題を冷静に見るのではなく、一時的な自己愛から感情的に行動したり、相手への不満を即座に態度に表すような行動をとることが目立ち、指導を受け入れてくれないようになってきている。そのような学生の態度に教員は戸惑い、実習を無事に終了させるために、挫折しないよう励まし、さらに何かのことでほめたりして、意欲の低下を防ぐ心遣いをしなければならない。

また実習課題に対しては、自己本位な見方が強く利用者や職員の状況を客観的に見ることができない。その結果、感想文のような記録になったり、個別の介護計画も自分がしたいことを計画上に載せたりしている。

そのようなことから、まず最近の学生を理解することが先決ではないかと考え、教員や職員の指導を受け入れるための自己効力感の程度や、それ以前に自我は出来上がっているのだろうかというところに疑問をもつようになった。その疑問を確かめる方法として、先行研究によって明らかにされている尺度である自己効力感尺度と、学生が見せる社会性の未熟さや、やる気の無さの程度を表すアイデンティティ尺度から見ることにした。

その際、本学の社会福祉学部の一部の学生の状況と福祉介護コースの学生との比較も試みた。

2. アイデンティティとは

アイデンティティは、自我同一性などとも訳されるように、パーソナリティの核心に関係する概念として、自分の存在の証明として、また他者からも認められるものを表している。自己感覚や自己意識を表す言葉として、日常的に使われている言葉である。アイデンティティは年齢や経験によって変化する。生まれた家族環境から始まり、時代や文化、社会的環境等に影響されながら確立していく。そのような中での青年期の特徴についてエリクソン (E.H.Erikson 1902-1994) は、「青年期や、後期学童期及び大学在学期という極めて長期化した見習い期間は、心理・社会的モラトリアムとみなすことが出来る。性的にも知的にも成熟に達するが、最終的なコミットメントの延期を認可されている期間である。・・・将来配偶者となり親となる人間は、まずここでその社会が提供する何らかの形態の学校教育を受け、将来の労働に必要な技術的及び社会的な基本原理を学習する。¹⁾」と述べている。また、「青年期はアイデンティティという肯定的要素と否定的要素(拡散状態)がつかねにせめぎあっている状態である²⁾。」ともいう。アイデンティティの拡散状態とは、「自分が無い感覚」、「自分が何ものかわからなくなっている状態」、「バラバラの自己像があるのみで、統一の取れない状態」などを指す³⁾。拡散状態の臨床的な特徴のひとつとして「親密性」を問題とし、最近多く見られる傾向として「親密な対人関係をもとうとするとき、自己が他人に吸収されてしまう不安、反対に拒絶される不安のため、表面的な関係になったり、反対に熱狂的に親密になろうとして拒否されたりする⁴⁾。」ことが目立つようになってきている。この点は特に、最近の青年の特徴といえる。自分が傷つくことを恐れて深い人間関係を持つとしなかつたり、自分の事を話そうとせず、また友人のことも話さずに友人との良好な人間関係をとりとうするため、問題が深刻になったり、問題の発見が遅れたりすることもある。

一方、福祉介護コースの学生は将来、介護の仕事につくという進路を選んでいる学生である。「モラトリアム人間」のように自分の進路決定を延期しているわけではない。下山が書いているように「職業決定は青年期の自我の確立のさまを評価する重要な指標であることを考慮するならば、・・・大学生の職業未決定もアイデンティティの発達との関連で見ていく必要があるといえるだろう⁵⁾」という見方をすれば、福祉介護コースの学生はアイデンティティが一般の学生より発達していると考えられる。そこで、下山が実施した一般の大学生や先行研究のある同じ専門職教育を受けている看護学生、そして本学の社会福祉学部や福祉介護コースの学生のアイデンティティの状況を比較したいと考えた。

3. 自己効力感とは

職業の選択が高等教育と同時になされる点でよく似ている看護教育において、自己効力感の研究は多い。やはり、実習という専門的知識と技術が必要とされ、またそれらの条件が重なった状況下で、瞬時に判断を求められる現場であるため、ストレスも多く介護福祉士と同じく実習への意欲の低下などから満足な実習ができずに終わってしまうこともあり、問題となっているようである。

自己効力感 (Self-efficacy) は、1977年にバンデューラ (A. Bandura) によって発表された概念で社会的学習理論と呼ばれ、「人間は、自分の人生に影響を与えるさまざまな出来事に対して、それをコントロールしようと努力する。・・・そうすることで個人的、社会的な利益を保証できるからである。人は、結果に影響を与えることができる能力があると予測をたてるようになる。予測性を持つと、前もって準備をする心構えができてくる。その人の人生に悪い結果をもたらすような影響を取り除く力が足りないと、不安、アパシー、失望などを生み出すことになる。⁶⁾」といわれている。そして坂野はバンデューラのこの予測について次のように説明している。「バンデューラは、個人の認知機能 (予期機能) を取り上げ、それが行動変容にどのような機能を果たしているかを明

らかにしようとした。・・・「予期機能」には2つのタイプがあるとされ・・・第1のタイプは、ある行動がどのような結果を生み出すかという機能であり、これを「結果予期」、第2は、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという予期、「効力予期」である。⁷⁾」この個人が自分に行動を起こす以前に、その行動がもたらす実現の結果を予測する力を自己効力感と言っている。つまり、実現される結果の最終的な予測とその実現のために自分の持つ知識、能力の予測について言っている。もしこの予測が自分には達成できないという時は失望し、劣等感に陥る。さらにその結果、個人の行動として、無気力・無感動・無関心となり、あきらめたり、抑うつ状態になるのである。また実現できると考えたときは、積極的になり、自信に満ちた行動となるというのが自己効力感である。

実習に臨むにあたって、学生が無気力・無感動・無関心という態度を見せると予測したとき、この自己効力感という見方を実習に臨む前に、学生の学力としてではなく、実習課題に向かう力としてみてはどうかと考えた。

自己効力感には、①遂行行動の達成、②代理的経験、③言語的説得、④情動的喚起により、行動が活性化されたり、行動を修正したりする。①の遂行行動の達成では、ある行動により成功感を感じたとき上昇し、逆に失敗感を感じたとき下降するというものである。②の代理的経験では、他人の行動を観察して「これなら自分でもできそうだ」と感じたり、失敗した場面を見た時自信を喪失したりすることである。③の言語的説得では、遂行行動の達成や代理的経験からくる自己効力感を他者から言語によって強化されたり、補助的に付加されたりすることである。④の情動的喚起では、行動する直前、胸がドキドキしたり、気持ちが高ぶったりする自分の情動を感じても、落ち着いてきたときはやれと感ずるといえるものである。実習指導の前にはこれらのことを予測し、自己効力感に影響すると考えられる。

4. 研究目的

- 1) 社会福祉学部および福祉介護コースの学生のデータと先行研究のデータを、学科別、学年別にアイデンティティの確立状況を比較することにより、職業選択の意識や実習経験との関係を検討する。
- 2) 社会福祉学部および福祉介護コースの学生のデータと先行研究のデータを、学科別、学年別に自己効力感について比較することにより、職業選択の意識や実習経験の関係を検討する。

5. 研究方法

- 1) 調査対象 本学の社会福祉学部の介護概論受講の学生と福祉介護コースの学生。調査票に不備のあるものは除いた。
- 2) 調査期間 社会福祉学部生：2006年9月27日の介護概論の授業時。福祉介護コース学生：1回生、3回生は2007年1月10日、2回生は2006年9月25日、4回生は9月29日の各実習指導時間内。
- 3) 調査方法 アイデンティティ尺度⁸⁾と自己効力感尺度⁹⁾の質問紙による調査。
- 4) 倫理的配慮 事前に学生には、プライバシーは守り、個人情報を出さない。成績等に影響することはない。学生指導の参考にすることを説明し、回答の収集を行った。
- 5) 分析方法 ①統計解析ソフトSPSS12.0Jにて記述統計(平均値、標準偏差、最高値、最低値)を使用。

6. 調査結果

1) 回答者の属性(表-1)

今回調査した介護概論の授業は、社会福祉学科の学生は1、2回生で、福祉心理学科の学生は2回生を中心に受講するため、社会福祉学科の学生の3、4回生と福祉心理学科の学生の4回生は回答数も少なかったため省いた。

また、回収された回答のうち学年や年齢のない不備なものも除いている。アイデンティティ尺度と自己効力感尺度では多少回答数に違いがあるが、アイデンティティ尺度の有効回答数の状況について表-1に示した。しかし自己効力感については、アイデンティティの回答数と僅かな違いしかないため省略する。アイデンティティ尺度の社会福祉学部の有効回収率は、77.7%で、福祉介護コースのそれは91.5%であった。

2) アイデンティティの確立(表-2)

アイデンティティ尺度の調査結果は、尺度作成時に成田らが調査したのは1992年と15年前であり、今よりアイデンティティは確立していただのではないと思われるが、当時の都内の2回生と4回生の基礎得点は14.7点と14.2点である。学年による差は見られない。しかし確立得点は、2回生が17.1点、4回生が19.1点で、どちらも基礎得点より高く、また、2回生は2.4点高いが4年生では4.9点高くなっている。この結果について下山は、アイデンティティの基礎は、青年期が終わりに近づくとつれてより安定したものとなり、アイデンティティの確立が進むと考えられるためこの結果で確認されたとしている。

表-1 回答者の属性(アイデンティティ尺度)

	回答数	性別		平均年齢
		男性	女性	
社会福祉1回生	57人	34人 (59.6%)	23人 (32.4%)	18.6歳
2回生	34人	19人 (55.9%)	15人 (44.1%)	19.5歳
福祉心理1回生	14人	8人 (57.1%)	6人 (42.9%)	18.9歳
2回生	57人	24人 (42.1%)	33人 (57.9%)	19.5歳
3回生	19人	12人 (63.2%)	7人 (36.8%)	20.4歳
福祉介護1回生	27人	14人 (51.9%)	13人 (40.1%)	18.9歳
2回生	22人	2人 (9.1%)	20人 (90.9%)	19.5歳
3回生	24人	5人 (20.8%)	19人 (79.2%)	20.1歳
4回生	24人	5人 (20.8%)	19人 (79.2%)	21.4歳

大学生の職業アイデンティティの調査でも学年との相関が大きく¹⁰⁾、また、職業情報の有無との関係もあることから、看護学生の辻岡ら3回生の基礎得点23.6点、確立得点27.1点といずれの得点も高くなっているのは、やはり職業教育とも関連があると思われる。また、今回調査した本学の社会福祉学生全体の基礎得点は、20点を超えており、下山らの調査と比べてどの学年も高いことから、社会福祉学部の学生も学部の選択において、職業を意識していると考えられる。

福祉心理学科では、基礎得点、確立得点ともに学年との関係がみられない。それは各学年の人数が揃っていないためと思われる。福祉介護コースの場合も人数は少ないが、少ないなりに数がそろっているため学年との関係が出ていると考える。

次に確立得点だが、全体的に基礎得点よりどの学年も高くなっている。その差をグラフにして比較したところ、図-1のようになった。この項目

は、自己の主体性や自己への信頼度の形成を表す項目である。社会福祉学部の学生は、都内の大学生よりアイデンティティは確立していると見ることができる。下山らの調査の4回生は就職を目前にしているが社会福祉学部の1回生と比べても低い。また、辻岡ら¹¹⁾の看護学生とは、差が無かった。

福祉介護コースの学生は、僅かながら学年が上がると得点もあがるという関連性を示し、基礎得点では1回生は福祉心理学科の1回生より低いものの、これも学年が上がると共に上がっているのは、やはり実習の経験が関係しているからではないだろうか。

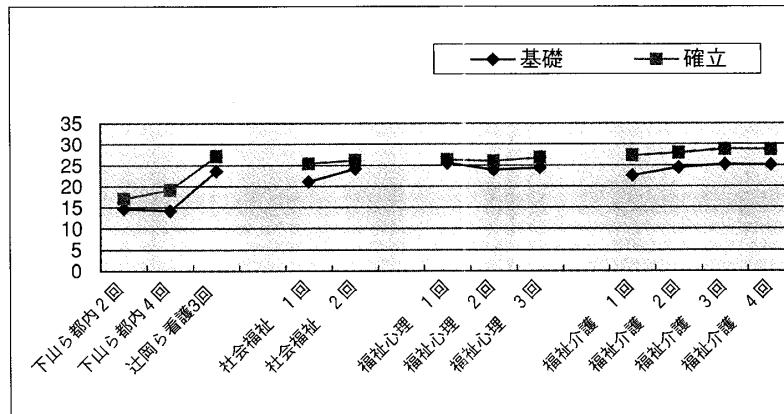
3) 自己効力感の状況 (表-2)

自己効力感は、表-2のとおり成田らのコミュニティサンプルが一番高く、奥津らの看護3回生が一番低い。社会福祉学部全体では、66.0から70.7点の間にあり、福祉介護コースの学生は、70.6

表-2 アイデンティティの調査結果

	回答数	基礎点				確立点			
		平均点	標準偏差	最低点	最高点	平均点	標準偏差	最低点	最高点
下山ら都内 2回生	376	14.7				17.1			
下山ら都内 4回生	112	14.2				19.1			
辻岡ら看護学 3回生	189	23.6				27.1			
社会福祉学科 1回生	56	21.1	5.3	10	31	25.4	4.6	15	37
2回生	34	24.2	6.1	10	38	26.2	5.4	16	40
福祉心理学科 1回生	15	25.5	5.9	18	39	26.3	5.7	18	37
2回生	57	23.9	4.8	11	34	26.0	4.8	14	37
3回生	19	24.4	5.7	14	35	26.8	5.0	16	34
福祉介護コース 1回生	27	22.6	6.5	10	40	27.3	4.5	17	35
2回生	22	24.5	5.1	11	33	27.9	3.5	19	35
3回生	24	25.2	4.7	16	35	28.8	3.3	22	34
4回生	24	25.1	5.2	14	34	28.7	3.8	18	40

図-1 アイデンティティ 比較



から75.6の間にある。おおよそ5点高く、標準偏差も小さい傾向にあり、まとまった感じを受ける。最高点も91から93点と大きな差が無く、最低点も1回生の39点を除くと、53, 54点で差が無く全体の中でも高くなってきている。看護大学生の沖野ら¹²⁾の70.0より高く、標準偏差も一番小さい。1年から学年を追うごとに高くなってきている。奥津らの調査¹³⁾の62.7については、臨地実習が日本でも最先端医療を提供している特定機能病院であり、他の医療施設とは違って重症の患者を多く抱えた現場であることから学生が実習に臨む前のストレスはかなり高いと考えられる。

7. 考察

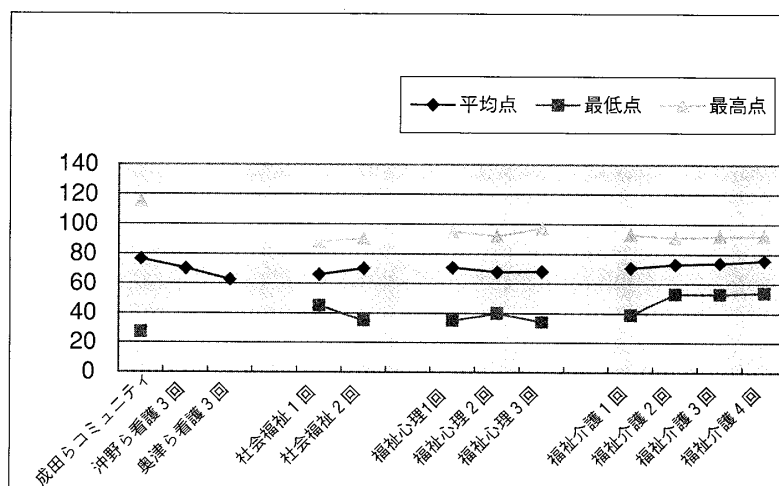
今回使用したアイデンティティ尺度は、下山が大学生のモラトリアムの状態を検討するため職業未決定との関係で検討を重ねて作成したものであ

る。職業の決定は青年期の自我の確立と関係するとし、下山は国立大学1校、私立大学4校で調査した結果、自分の確立の程度を予測できる可能性が示唆されたといっている¹⁴⁾。一方、介護学生より実習の機会の多い看護学生に実施した辻岡らは、やはり下山の結果より高いため未確立とは言えない結果であるとし、首尾一貫感覚（Sense of Coherence : SOC）尺度との相関関係から、アイデンティティの基礎得点や確立得点は積極的なストレス対処能力であるSOCとの関係が強く、実習態度における対人関係はSOCが強いほど円滑な人間関係が保てると考えられるとしている¹⁵⁾。今回の結果において、社会福祉学部の学生のアイデンティティ尺度が高く出たのは、社会福祉関係の専門職を実施する教育機関に入学しているという段階で既に、自分の適性を客観的に見ている点で、アイデンティティが形成されつつあることを物語っていると見えよう。また、福祉介護コースの学

表-3 自己効力感 調査結果

	回答数	平均点	標準偏差	最低点	最高点
成田らコミュニティ	1641	76.5	13.7	27	115
沖野ら看護学科 3回生	221	70.0	12.2		
奥津ら看護学科 3回生	44	62.7	8.2		
社会福祉学科 1回生	55	66.0	10.4	45	88
2回生	35	70.0	13.7	35	90
福祉心理学科 1回生	13	70.7	16.7	35	95
2回生	62	67.8	11.0	40	92
3回生	18	68.0	15.8	34	97
福祉介護コース 1回生	27	70.6	12.4	39	93
2回生	22	72.9	8.9	53	91
3回生	24	73.8	10.1	53	92
4回生	24	75.6	10.8	54	92

図-2 自己効力感 比較



生はさらに具体的な職業を選択しており、職業決定のあり方から自分の確立の程度は高いと予測でき、職業決定を青年期の自我の発達課題として位置づけたとき、自分（≡アイデンティティ）の確立との関連性¹⁶⁾が現れていると考えられる。

実習は、個人の中に職業という具体的現実を経験し、社会の中に自分を位置づけるものであり、社会と学生との相互作用のプロセスを経て学生個人の中にアイデンティティが形成されると考えられる。その結果として、職業アイデンティティを確立している者ほど失敗の可能性があるとしても精一杯努力することを惜しまないのに対し、未確立な者は、目標を低く設定して努力を最小限にとどめ、失敗を避けようとし、偶然の出来事が及ぼす影響を誇張し、職業決定の動機を外因的に帰属させる態度¹⁷⁾となるのではないかと。しかし、いったん獲得した職業アイデンティティは不変のものではなく、その後の人生経験から、問い直しや変容が起こる可能性もある¹⁸⁾が、職業アイデンティティ発達・形成のためにはそれを意図した支援プログラムの有効性や早期実施の必要性も提言されている¹⁹⁾。

以上より、やはり福祉介護コースの学生のアイデンティティは、実習の経験を重ねた結果安定したものに発達していったといえるだろう。しかし中には未確立な学生も含まれている。それらの学生を、アイデンティティの基礎、確立の視点に焦点を当てた指導の有効性と必要性がわかった。

自己効力感については個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指し²⁰⁾、臨床・教育場面ではある特定の課題や状況での行動に影響するものであり、日常的な場面での行動にも影響を与えるものである。しかし、認知のしかたに過去の失敗や成功の経験などからくる個人差があるため、特性的自己効力感となっている。成田らの調査は、13歳から92歳までのコミュニティサンプル（1524人）であり学歴は多くが高卒以上であるが女子の50%が主婦でパート、事務職、学生などがそれぞれ10%ということで、強いストレス状態あるとは考えにくい。それに比べて、介護福祉士学生や看護学生の実習前は強いストレス状態にあるため、その差が出ているので

はないかと考える。例えば奥津らの看護学生の実習前の自己効力感は62.68と非常に低いが、その実習後は、70.25と7.57もの上昇が見られる²¹⁾。そのストレスを乗り越え前向きにやる気を出せたため、意欲的な実習ができ、満足感も得られ自己効力感も上がることがわかった。沖野らは、実習前は一般の女子より低い値70.0であるが実習後はやはり72.8と上昇していたため、臨床を経験することにより自分を客観的に振り返り、能力への直視や厳しい評価、自信の低下を迫られた点が影響していると推測している²²⁾。また、実習での経験がそのケアに対しての自己効力感を高める最も重要な側面をもつことも、バンデューラのいう実践が最も自己効力感を高めるという説に一致しているとの報告もある²³⁾。自己効力感は、何か行動によって効果が期待される状況の有無によって、あるいは、その感じる難易度によって異なるとも考えられる。

自尊心が高ければ、困難な作業でもやり遂げて成功し、その成功経験が個人の自己効力感を形成し、逆にできると思っていたことが失敗した場合下降し、結果を過小評価してしまうため、負の相関関係が出る²⁴⁾。本学の学生の場合も概して高い傾向にあり、特に福祉介護コースの学生は、社会福祉学部全体より高い。それは実習の経験とともに上昇傾向にあった。自己効力感の低い学生の場合、2通りある。1つには自己への課題が高いため結果的にみんなより自己効力感が低くなるが、その学生を除き、2つ目の過去の実習の失敗体験から実習への不適応となり、また課題達成等にも自信をもてない学生は自分を過小評価し、自己効力感を低くしていると考えられる。バンデューラの言うように自己効力感が良い方向に変化するための情報源と主要な誘導方法の試み、言語的説得等も必要であると思われる。

8. まとめ

介護福祉士学生の実習指導がこれまでより大変になってきたという日頃の感想から、学生の職業人になるという自覚や課題達成に向けてのやる気はあるのだろうかという疑問を持ち、アイデンテ

イティの確立の度合いと自己効力感の高さについて先行研究と福祉介護コースの学生が所属する社会福祉学部の学生との比較を、アイデンティティ尺度と自己効力感尺度を用いて試みた。

本学の社会福祉学部生は、一般の学部生と比較して、職業教育機関に入学してきていることも関係していると思われるが、アイデンティティは高く、モラトリウムとは言えなかった。福祉介護コースの学生のアイデンティティについては、学年が上がるごとに基礎得点、確立得点ともに形成・発達がみられ、実習の経験の積み重ねによると考えた。それは実習における実社会での現実的な経験から得た自信により、基礎得点に示される自己の安定が図られ、確立得点で示される自己の主体性や自己への信頼度が増した結果、両者の相互関係もあいまってアイデンティティが形成・発達しつつある結果と思われた。

自己効力感の場合、自己を知れば予想される困難の予測につながり、自己効力感を下げることになる場合もあることから、今回の調査ではその内容までは言えないが、本学の社会福祉学部の学生は、一般の結果より低く、難易度の高い実習を控えた学生より高い中間にあった。福祉介護コースの学生は学年が上がるごとに高くなる傾向にあり、実習経験の積み重ねが介護への自信をつけているものと思われる。しかし、個々の学生を見たときには、今回の研究で得た知見をもとに、実習指導において学生の感受性をよく観察し、前回の実習の成功経験や失敗経験を知り、達成できなかったことを言語的説得により自己効力感を高める指導が必要であると思った。

今後は、実習後の自己効力感の変化と個人特性からも検討できるように縦断的調査も実施し、専門職アイデンティティ形成のために必要な支援方法も研究したいと考えている。

注

- 1) E.H.エリクソン/J.M.エリクソン著、村瀬孝雄・近藤邦夫訳(2001)「青年期と学童期」『ライフサイクル その完結』みすず書房、100頁。
- 2) 鍾幹八郎(2002)『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ、265頁。
- 3) 前掲書、258頁。
- 4) 前掲書、287頁。
- 5) 下山晴彦(1986)「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34、20頁。
- 6) A.Bandura著、本明寛・野口京子監訳(2001)『激動社会の中の自己効力第3版』金子書房、1頁。
- 7) 坂野雄二・前田基成(2002)『セルフ・エフィカシーの臨床心理学 初版』北大路書房 3-4頁。
- 8) アイデンティティ尺度は、1992年に下山晴彦が、日本の大学生の「モラトリウム心理」と「アイデンティティの確立度」との関係を検討するために開発した尺度である。回答は、4件法で求め、各項目1~4点「よく当てはまる(4点)」~「全く当てはまらない(1点)」、逆転項目については「よく当てはまる(1点)」~「全く当てはまらない(4点)」としている。1~10の質問の項目を「アイデンティティの確立」の得点、11~20の質問の項目を「アイデンティティの基礎」の得点とする。「アイデンティティの確立」の項目は、自己の主体性や自己への信頼度が形成されていることを表す項目であり、「アイデンティティの基礎」の項目は、自己の安定が得られず、不安や孤独におそわれる気持ちを反映したもので逆転項目により構成されている。下山晴彦(2001)「アイデンティティ尺度」『心理測定尺度表I 一人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』サイエンス社、91-94。
- 9) 自己効力感尺度は、成田健一、下中順子らが、特異的自己効力感を測定する先駆的研究であるSherer et al(1982)のSE尺度を翻訳して作成している。1)行動を起こす意志、2)行動を完了しようとする意志、3)逆境における忍耐力、などから構成され、23項目ある。評定は双極の5件法で、合計点(23点~115点)の高さにより自己効力感の程度を表している。成田らの研究で男女・年齢によらず、十分な信頼性・妥当性を有する尺度であることが確認されている。成田健一・下中順子・中里克治他(2001)「特性的自己効力感尺度」『心理測定尺度表I 一人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』サイエンス社、37-42。
- 10) 鍾幹八郎・宮下一博・岡本祐子編(1997)「職業アイデンティティに関する研究」『アイデンティティ研究の展望IV』ナカニシヤ出版、191-192頁。
- 11) 辻岡芳美、大山由紀子、沖野良枝ほか(2003)「看護学生の成人看護学実習における態度とアイデンティティ、首尾一貫感覚との関係-アイデンティティ尺度および日本語版SOC(Sense of Coherence)尺度による分析-」『公立甲賀病院紀要第6巻』公立甲賀病院31-36頁。
- 12) 沖野良枝、大山由起子、辻岡芳美ほか(2003)「看護学生の臨地実習における態度関連要因と特性的自己効力感の変化」『第34回日本看護学会-看護教育-』28頁。

- 13) 奥津文子, 片山由美, 大矢千鶴, ほか (2002) 「効果的な臨地実習指導法の検討—学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察—」『京都大学医療技術短期大学部紀要22』36頁.
- 14) 下山晴彦 (1986) 「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34-1、29頁.
- 15) 辻岡芳美・大山由紀子・沖野良枝ほか (2003) 「看護学生の成人看護学実習における態度とアイデンティティ、首尾一貫感覚との関係」『公立甲賀病院紀要』6、36頁.
- 16) 下山晴彦 (1986) 「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34、29頁.
- 17) 前掲論文、186頁.
- 18) 前掲論文、194頁.
- 19) 前掲論文、196頁.
- 20) 前掲論文 (9)、69頁.
- 21) 前掲論文 (13)、35頁.
- 22) 沖野良枝・大山由紀子・辻岡芳美ほか (2003) 「看護学生の臨地実習における態度関連要因と特性的自己効力感の変化」『メンタルヘルスの社会学』9、32頁.
- 23) 坂野雄二・前田基成 (2002) 「看護教育」『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』北大路書房、151頁.
- 24) 前掲論文 (9)、308頁.

参考文献

- 1) 下山晴彦: 「大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—」, 『教育心理学研究』, 40: 121-129, (1992).
- 2) 下山晴彦: 「男子大学生の無気力の研究」, 『教育心理学研究』, 43: 145-155 (1995).
- 3) 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子編 (1984) 『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』ナカニシヤ出版.
- 4) 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子編 (1995) 『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』ナカニシヤ出版.
- 5) 会沢勲・石川悦子・小嶋明子編 (1998) 『移行期の心理学—こころと社会のライフイベント』ブレーン出版.
- 6) 岡本祐子編 (2002) 『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房.
- 7) 鐘幹八郎・山下格編 (1999) 『アイデンティティ』日本評論社.
- 8) 岡堂哲雄・中園正身 (1981) 『エリクソンは語る—アイデンティティの心理学』新曜社.